

# シリーズ ひと ～現場に生きる～ 第9回

まつばら たかゆき はらだ ゆうじ  
松原 孝幸さん 原田 裕司さん 下川町 (株)谷組 工事部第1課



現場事務所にある重機の前で（右から）松原さんと原田さん

まちの面積の約9割を森林が占めている下川町。人口3,300人ほどのまちですが、循環型林業経営や産業クラスター活動などを基盤に、森林を核にしたまちづくりで全国的にも知られています。

(株)谷組は、その下川町に本社を置く会社です。同社が2017年度から担当しているのが、地元を通る国道239号の上名寄道路の改良工事。2018年春から一緒にこの現場で活躍している工事部次長の松原孝幸さんと係長の原田裕司さんに会いに行ってきました。

## 数年ぶりの一緒に現場

1941年に下川町で創業した(株)谷組。谷組では、まちの発展が企業の発展にもつながると、以前から地域の活性化やさまざまな地域貢献活動にも積極的に取り組んでいます。2006年にはフルーツトマトの栽培、2015年からはコントラクター事業（農作業委託事業）を開

始し、農業分野に参入して地域の特産品開発や後継者不足の農業経営の一環に尽力するなど、地域を元気にする活動を実践しています。また、道路の維持管理にも長く携わっており、2011年に発足した「北海道維持除雪管理ネットワーク協議会」、2015年に発足した「北海道維持管理業務連絡協議会」では、谷博之社長が両方の事務局長に就任し、道内の建設業の発展に寄与するとともに、ネットワーク化することで共通の課題に対応していこうと努力してきました。

谷組には、道路の維持管理業務を中心に担うチームと、道路や河川、農業などの一般土木の現場で活躍しているチームがあります。松原さんと原田さんは後者のチームで、これまで一般土木の現場を担ってきました。

二人が同じ現場を担当するのは数年ぶりです。実はともに名寄市生まれの下川商業高校卒業生。2歳年上の松原さんは、高校を卒業してすぐに谷組に入社しまし

た。最初の2年間は企業委託生制度を活用して旭川の専門学校で学びながら、夏休みには実習を兼ねて、現場で経験を積みました。専門学校を卒業してからは現場ひと筋。これまで道路の現場を多く担当してきました。

一方、原田さんは砕石プラントでオペレーターをしていましたが、松原さんと同期入社先輩に誘われて作業員として谷組で働き始めました。作業員で3年ほど経験を積み、社員として勧誘されて正式に入社することになりました。ともに現場代理人を務められる技量を有しており、国道239号の改良工事現場では、松原さんが現場代理人を務め、現場を仕切り、原田さんは監理技術者として発注者対応などを行って、それぞれ役割分担をしながら工事を進めています。

「2017年度は中川町でバイパス道路の工事を担当していました。すべて一人でやっていたので大変でした。でも、この現場は原田がいるので安心です」と松原さん。一方、原田さんも「発注者対応などで現場に行けないことも多く、自分では気が付かないことをどんどん松原がやってくれるので、すごく頼りにしています」と絶妙なコンビで現場を切り盛りしています。

### 今年度から週休2日制を導入

これまで道路や河川、農業などの現場を担当してきた二人。以前は大変な現場もありました。「どんな現場でもちょっとした苦労はありますが、印象深いのは、今から15年ほど前に農業の仕事で担当した頭首工の現場です。冬期の上、工期が短かったのであまり休みが取れず、体力的にもきつかった現場だったことを今でも覚えています」と松原さん。

しかし、今は建設業界も働き方改革が進んでおり、谷組も2018年4月から週休2日制を導入しています。「導入当初は土曜日でも仕事ができるイメージが残っているので、あれ？何か1日違うと思うことがありました」と笑う原田さん。スケジュール管理では「土工であれば少し短縮できるけど、作工物はあまり短縮できないなど、仕事の内容を見極めることが大切」と声をそろえます。また、現場ではマネジメント力が問われ

ます。「作業ごとにどの機械を使うのか、狭いところは小さな機械で対応するなど、事前にしっかり打ち合わせて現場に臨んでいます」と、経験の積み重ねと事前の準備が現場をスムーズに動かす鍵になることを教えてくれました。

取材で訪問した11月下旬は、日没が早くなっている上、積雪が始まる直前で、「この時期になると雪が積もる前にやらなければならないことが多い」と、小雨の中でも作業を続け、緊張感が漂っていました。

それでも週休2日制の導入で、夏でも遠くまで出かける機会が増えるなど、リフレッシュする時間を持つようになったようです。

### 現場で担う地域貢献活動

町内の清掃美化活動や草刈り、小学生向けの工事現場見学会など、地域貢献活動に積極的に取り組んでいる谷組。地域貢献活動は、主に道路の維持管理を担うチームが担当していますが、松原さんもサンルダムの工事にかかわったときに、小学生の見学会に対応した経験があります。「現場で出る濁った水をきれいにして川に流していることを知ってもらおうと、実際にその過程を見てもらいましたが、水質試験のような感じだったので、みんな難しい顔をしていました（笑）。でも、次の見学会のときに重機に乗せてあげたら、みんな喜んでいました」と思い出します。



現場事務所の原田さんのデスクの前で



雪がちらつく中、工事が進む、二人が担当する国道239号の道路改良工事

また、「農業の現場では、現場事務所に地元の方が訪ねてくることが多い」と言う原田さん。花火大会への寄付や夏祭りのビールチケット購入など、できるだけ要望に応えるように努めてきたといいます。全く知らない人が、直接、現場事務所に訪ねてくることも多いそうで、地域の中に建設業が根付いていること、そして頼りにされていることの証といえるでしょう。

### 完成したときの達成感

「松原と一緒に担当した高規格道路の工事を終えたときは達成感がありましたね。私が担当した初めての国（北海道開発局）の仕事でもありました。農業の仕事も小さな区画のものを大きな1枚の圃場<sup>ほじょう</sup>に仕上げたときは満足感があります。農業の場合は雪が積もる前に終えなければいけないので工期は大変ですが、やはり終わった後の達成感は何物にも代えがたい」と原田さん。松原さんもこの仕事の醍醐味<sup>だいごみ</sup>は完成したときの達成感だと言いますが、「道路は工事にかかる時間は長いのですが、走ってしまうと一瞬なんですよ」と笑います。

それでも今、工事を進めている国道239号は、普段身近に自分たちがよく使っている上、維持管理チーム

が長く維持や除雪を担っている道路なので、思い入れがあるようです。完成した道路を走る気分はどんなものなのでしょうか。

### 知っている人がいたからこそ長く続いた

後輩の指導にも当たらなければならない二人は、「後輩には早く資格を取得してもらい、楽をさせてもらいたいです」と笑います。

建設業では若い世代の離職率も課題の一つですが、ここまで長く続けられた背景について原田さんは「社員に誘われた時期のタイミングが良かったことと、以前から知っている人が何人かいたので仕事がしやすかったこと」と振り返ります。松原さんをはじめ、知っている人が社内にいることで、仕事の悩みや苦勞を分かち合える環境があり、それが安心感につながって、仕事のプレッシャーを跳ね返すエネルギーになったように思います。また、地域の人に自分たちの顔が見える仕事であり、それが知らず知らずのうちに責任感や仕事の醍醐味にもなっているのではないのでしょうか。

地域の人とのつながりを実感できること——地方の建設業には、そんな魅力があるように感じました。